

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2022年 10月 13日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 京都大学大学院情報学研究科

職 名 助教

氏 名 大木 健太郎

助成の種類	令和4年度・国際会議開催助成		
国際会議名	第10回 IFAC シンポジウム ROCOND 2022		
開催期間	2022年 8月 30日 ~ 2022年 9月 2日 (8月30日は参加者の Zoom 発表練習の場とし、本会議は8/31~9/2の3日間)		
開催場所	オンライン		
参加者	総数 参加登録127名(8月31日 165名, 9月1日 141名, 9月2日 132名参加)※詳細は成果の	内訳 参加登録:120名(内一般72名, 学生 38名), 招待:7名 ※講演登録は26カ国の機関よりあった。詳細は成果の概要に記載	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	事業に要した経費総額	2,024,687 円	
	うち当財団からの助成額	466,356 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 参加費, 計測自動制御学会, 株式会社アイシン, IFAC Foundation	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	人件費(アルバイト代・謝金・奨励金)	401,221	401,221
	会議費(Zoom ライセンス)	25,135	25,135
	海外口座振込手数料	40,000	40,000
	人件費(若手研究者助成金)	14,428	
その他(雑費)	12,420		
会議費(オンライン学会運用システム)	1,531,483		
合 計	2,024,687	466,356	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

第 10 回 IFAC シンポジウム ROCOND 2022

成果の概要

報告者：大木健太郎（京都大学 大学院情報学研究科 数理工学専攻・助教）

貴財団による国際会議助成について、下記の通り報告いたします。

開催概要

研究集会「国際シンポジウム：第 10 回 IFAC シンポジウム ROCOND2022」（欧文事業名 10th IFAC Symposium on Robust Control Design）は、2022 年 8 月 30 日～9 月 2 日の日程でオンライン開催された（30 日はオンラインシステムへの参加および発表練習として利用）。ROCOND は、3 年おきに開催されるロバスト制御理論・ロバスト最適化およびそれらの応用に特化した研究集会であり、産学界からの参加者からなる最先端理論・技術の意見交換や活気ある討論が盛んであることが特徴である。当初 2021 年の夏に初のアジアでの開催予定であったが、コロナ情勢の不確かさもあり、会期を 1 年遅らせての開催となった。残念ながらコロナ情勢による入国規制等の不確かさが残ったため、対面での開催は断念し、Zoom を用いたオンラインでの開催となった。ただし、過去と同じく活気ある討論をするため、全世界から参加しやすくなるよう、会議の開催時間は日本時間でおおよそ 15 時～20 時を基本とし、ライブでの参加を促した。また、ウクライナ情勢を鑑み、ウクライナに所属機関のある参加者には参加費を免除する仕組みも用意した。

ROCOND 2022 は、ROCOND としての初のオンライン開催であったにもかかわらず、国内外からの 120 名の参加登録および招待者 7 名の参加があり、当初の予想よりも多くの参加者を得られた。講演申込は 26 カ国から 93 件あり、査読の結果より 52 件の選択された（本研究集会では講演者、参加者の国籍の情報は集めていないため、講演者の所属機関の所属国を計上した）。査読を介さない研究成果発表も含め、計 62 件の講演および 5 件の基調講演が 3 日間に渡り行われた。また、若手優秀発表賞の審査が行われ、4 名の最終候補者のうち 1 名が選出され、最終日に表彰された。

当日の様子

過去の対面で行われた ROCOND に対して、120 名の参加登録者数は数字の上では少ないものの、従来の参加者が欧米中心であること、および日本時間の 15 時～20 時でのオンライン開催であることを考慮すると、比較的多い参加者数・講演数であった。講演者がライブで来られないときのために、事前に講演ビデオの提出をしてもらっていたため、参加者はそのビデオを見ることもできたが、連日 100 名以上の参加者が実際に上記の日本時間帯で参加しており、議論も活発に行われた。とくに 5 つの基調講演では、100 人を超える参加者が確認された。一般講演の 62 件は、4 つの Zoom 会場で並列に行われ、海外からの発表者ならびに参加者が参加しやすいように時間帯を集中させた。各日の講演数および参加者数は下記の通りである。

- 8 月 31 日：基調講演 2 件，一般講演 21 件
参加者数 165 名（内 29 名が海外参加者）
- 9 月 1 日：基調講演 2 件，一般講演 23 件
参加者数 141 名（内 31 名が海外参加者）
- 9 月 2 日：基調講演 1 件，一般講演 18 件
参加者数 132 名（内 29 名が海外参加者）

参加者の集計は、基調講演の Zoom 会議の統計情報を用いたものである。なお、国内外の参加者の区別は Zoom での表示名で行ったため大よその数である。また運営など複数台のデバイスで参加された場合もあるため、実際の参加登録者数よりも Zoom 参加者数は多くなっている。また会期中は、京都に来ることを楽しみにしていた参加者のために、Gather Town（オンライン会議ツール）で京都の街並みを模したフリーミーティングスペースを用意し、そこに京都の観光名所の写真やリンクを用意して、研究交流も含めて参加者に好きな時間を楽しんでもらう場を設定した。

研究集会の成果

本シンポジウムの最大の目的である研究者間の交流は、対面の場合に比べて限定的ではあったものの、全体的には盛んに行われた。オンライン会議の限界からか、旧知の間柄の交流が主となっており、新規参加者との交流はあまり盛んではなかったのは心残りである。研究発表を通しての情報交換は、教授クラスの発表も多く、非常にレベルの高い研究集会であった。アカデミアだけではなく、航空宇宙（European Space Agency, JAXA 等）や自動車関係（ホンダ、トヨタ中央研究所、日野自動車等）だけからの産業応用のセッションもあり、学生や若手の研究者にとっては抽象的な制御理論の具体的な

応用方法を知る絶好の機会ともなった。これら産学両面からの研究成果発表には、理論応用の両面からの議論があり、互いに刺激を与え合う有益な3日間となった。

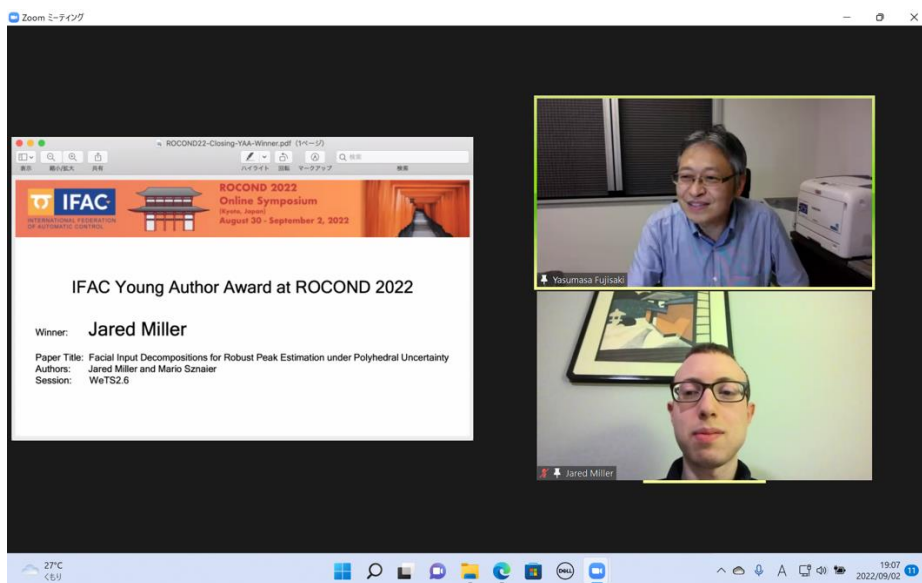


写真1：サイエンス大会の様子

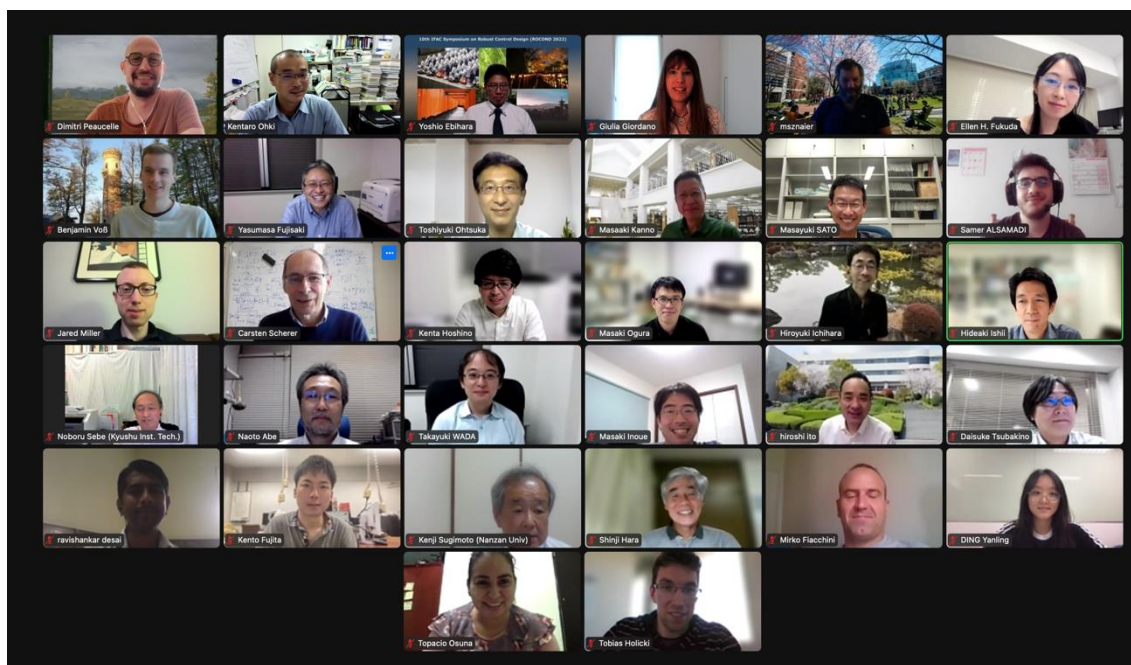


写真2：最終日のオンラインセッションの様子

写真3：最終日のオンラインセッションの様子

謝辞

最後になりましたが、本国際会議を開催するにあたり、貴財団よりいただきましたご支援に対し深く御礼申し上げます。